



往年の名器が集合

電子楽器コーナー新装オープン



昨年夏より仮展示の状態が続いていた電子楽器コーナーがようやく整備され、去る5月3日、装いも新たにオープンしました。

電子楽器は20世紀の大発明のひとつ。通信分野における電子技術の発達が生み出されて生まれました。それまでの楽器は、弦や空気や膜、また物体そのものを振動させて音を出していたわけですが、電子楽器は電気信号で直接振動を作り、いろいろな加工を経て最終的にはスピーカーから音を出します。1906年にアメリカで作られたテルハーモニウムという楽器が電子楽器の第1号とされていますが、大きさは家一軒ほどで重さは200トンもあったそうです。楽器博物館では所蔵していませんが、1920年代に発明されたロシアのテルミンとフランスのオンド・マルトノが実用品としては最初の2大電子楽器です。

電子楽器コーナーには主に日本で生まれた数々の初期電子楽器の名器がずらりと並んでいます。

国産初のリズム・マシン「ドンカマチック」(1963年東京・京王技術研究所=現コルグ)、電子オルガンの代名詞となった「エレクトーンD1」(1959年浜松・日本楽器製造=現ヤマハ)、日本初のシンセサイザーといわれる「試作1号機」(1969年東京・京王技術研究所=現コルグ)、日本初の大型アナログ・システム・シンセサイザー「システム700」(1976年大阪・ローランド)などです。ほかに電子オルガンの名品として今も絶賛されるアメリカのハモンド・オルガンB3(1955年以降アメリカ・シカゴ)、世界のシンセサイザーのパイオニアであり手本となったアメリカ・モーグ社の製品から小型の「システム35」(1974年アメリカ)、世界初のギター・シンセサイザー「GR500」(1977年大阪・ローランド)、世界初のバーコード読み取り式キーボード「カシオトーン701」(1981年東京カシオ計算機)など、総計30数点が展示されています。楽器博物館の所蔵品だけでな

く東京のコルグ株式会社と浜松のローランド株式会社からも貴重なヴィンテージ・シンセサイザーを多数お借りして展示しています。

お客様の反応も好評で、かつて実際に自分が使っていた機種も展示されており、懐かしくて涙が出るという声も聞かれました。

電子楽器はこれからもまだまだ新製品が生まれて歴史が作られていきます。この電子楽器コーナーもやっと生まれたばかりですが、これからどんどん成長していくことでしょう。なお、楽器博物館では過去の電子楽器を収集しています。もし古い電子楽器をお持ちでご不要の方がいらっしや

いましたら、楽器博物館にご連絡ください。



ローランド・システム700



ヤマハ・エレクトーンD1



コルグ・試作1号機



モーグ・システム35



往年の名器が
ズラリと並ぶ



コルグ・ドンカマチック

開館 15 周年記念企画第 1 弾

親指ピアノフェスティバル！



パンチガレ・ムビラス

楽器博物館開館 15 周年企画の第 1 弾「親指ピアノフェスティバル～みえてくるアフリカ～」が、7 月 3 日（土）午後開催されました。このフェスティバルは、親指ピアノと総称される、アフリカ各地に分布する、鉄片を両手の親指ではじいて鳴らす小さな楽器をとりあげて、その音楽と、同時にアフリカの文化も知ってもらおうと企画されたものです。ワークショップと演奏会、講演会、写真展の 4 本柱で構成されました。主催は楽器博物館と親指ピアノフェスティバル実行委員会。

楽器博物館では今までにも常設展や企画展、またワークショップやレクチャーコンサートを通じて何回かこの楽器を紹介してきましたが、今回は、日本に在住する親指ピアノ演奏の第 1 人者を個人・グループあわせて 5 組お迎えし、アフリカ支援活動の NPO で活動する専門家による講演も交え

て、豪華な内容でアフリカの現在をより深く紹介することができました。

まず 12 時 30 分から 2 時までは、アクトシティ研修交流センターで、タンザニアのリンバとジンバブエのムビラを使っての演奏入門ワークショップでした。リンバはサカキマンゴーさん、ムビラはムビラ・ジャカナカとハヤシエリカさんがそれぞれ講師です。どちらもアフリカ音楽に特有のポリリズム（同時に 2 拍子と 3 拍子が進行するリズム）にのりながら、指ではじき方を学びました。ムビラ 15 人、リンバ 12 人の参加者からは、「難しいけれど楽しい」の声。「うまく演奏できなくても、アフリカのリズムを感じて皆と一体感を味わうことが大切」と講師。



ムビラのワークショップ

続いて3時から7時までは、アクトシティ音楽工房ホールでコンサートと講演会、写真展が開催されました。トップバッターはムビラ演奏の中村由紀子さん。兵庫県神戸市からの参加です。中村さんはジンバブエでムビラを習得、ムビラ弾き語りと合奏法を紹介した世界初の教則本も書かれたムビラ奏法研究家です。ショナ族の伝統的なチューニングと奏法によるしっとりとしたムビラの音楽を披露してくださいました。生徒の森美歌さん、師匠のトンデライさんも1曲ずつ参加。



中村由紀子さん(右) 森美歌さん(左)

2番目は京都在住のマルチプレイヤー、ロビン・ロイドさん。カリンバを中心にして笛、太鼓、ガラガラといったアフリカやその他の国の民族楽器を縦横無尽に操り、雨の音や鳥の声などアフリカのジャングルを思い起こさせる、癒しの音楽を奏でてくださいました。



ロビン・ロイドさん

3番目は日本で唯一のタンザニアの民族舞踊と音楽を専門とする東京のグループ、ハクナターブ。ハクナターブとはスワヒリ語で「問題ないさ!」という意味だそうで、明るく元気な音楽とパフォーマンスが特徴。外国人として初めてタンザニア国立芸術大学へ正規留学したダンサーの伊藤宏子さんをリーダーに、ダンサーの黒田わかよ、親指ピアノのイリンバと太鼓のンゴマのスズキヤスハル、スズキアヤハルの4人で演奏。タンザニアのゴゴ族の親指ピアノイリンバのソロと二重奏、ゴゴ族の女性が脚に太鼓を挟んで演奏しながら踊るンゴマの音楽、マコンデ族の踊りと、エネルギーで迫力満点のステージでした。



伊藤宏子さん(左) ヤスさん(右)



ハクナターブの演奏でゴゴ族の踊り

4番目はNPO DADA: アフリカと日本の開発のための対話プロジェクト代表尾関葉子さんの講演で

「農村の暮らし:ジンバブエの伝統と現在(いま)」。

尾関さんは国連難民高等弁務官駐日事務所に勤務の後、ボランティア活動をきっかけにアフリカとかかわり、2000年からジンバブエに在住、その後DADAを立ち上げられました。日本では、世界最高のインフレ率や、大統領の独裁など、負の面しか報道されませんが、実際は、「勤勉で、家族思いで、音楽をこよなく愛する人々が住む国なんですよ」とのこと。都会に住む10代の若者も、田舎に帰ると一生懸命村のために働くということや、牛が財産であること、種子を残さないF1種のトウモロコシの栽培を今は見直して原種に戻りつつあること、など、たくさんの映像を使ってお話されました。



尾関葉子さん

5番目は大阪からサカキマンゴーさん。タンザニアに学び、アフリカ各地の親指ピアノを求めて今もフィールドワークを続け、伝統を踏まえつつテクノもパンクもファンクも超越した現代日本人ならではの表現を展開している親指ピアニストです。普通のリンバ、エレキ・リンバ、コンゴのリケンベ、ウガンダのルケメなどを使用して伝統曲から自作品までマンゴーワールドを展開。共演はマリオ(三木まさよ)さんとセイコさん。



サカキマンゴーさん(中) セイコさん(左) マリオさん(右)

そして最後は、東京の4人グループ、パシチガレ・ムビラズ。メンバーはハヤシエリカ、マサ(ムビラ・ジャカナカ)、スミ、そしてジンバブエ、ショナ族のトンデライさん。チューニングの異なる3台のムビラとマラカスのホーショーで祖先崇拝の儀式で演奏される曲を披露してくださいました。ムビラ3台の合奏はなかなかの迫力で、最後はお客さんも総立ちでダンスに参加。4時間続いたフェスティバルはにぎやかに締めくくられました。



写真展を見学する人々

また会場内には、出演者撮影の写真38点を展示し、演奏の合間に熱心に見学される人々の姿が見られました。



パシチガレ・ムビラズ 客席も立って踊りに参加

楽器博物館開館 15 周年

館長に聞く歩みとこれから その2

日本初の公立楽器博物館として開館した浜松市楽器博物館は、今年4月8日に開館満15年を迎えました。今年は15周年の記念の年。例年以上に数多くの活動が予定されています。所蔵資料数3200点、展示楽器数1200点、展示のほかにレクチャーコンサートや講座、CDの制作など、その活動は今や世界第一級となった浜松市楽器博物館の歩みとこれからについて、嶋和彦館長にインタビューしました。今回はその2回目です。



一前号では、欧米の楽器博物館と比較しての浜松市楽器博物館の特徴をお話いただきました。世界の楽器を同じ目線で平等に扱って展示している、という世界初の誇るべきコンセプトを持った博物館であるということがわかりました。さて、今号では、そのコンセプトに沿ってどのような活動を展開されているのか伺いたいと思います。まずは、博物館というものの活動について教えてくださいませんか。

はい、博物館の活動というのは、国際博物館会議や日本博物館協会というのもあったりして、世界中どこでも同じように活動の原則は決まっています。社会的な使命というものがあつたんですね。大きく分けると、収集、保存、調査研究、教育普及の4つです。博物館ですからまず実物資料や関連情報を収集します。これが博物館の大きな仕事です。次にそれを整理して、必要なら修理や修復をして永久に保存し後世に残します。文化遺産を大切に守って後世に残していくこと、これが最も大きな使命なんです。そしてその資料がどのようなものであるのか調査研究します。その結果を展示して世の中に広く紹介する、つまり社会の役に立つように公開するわけです。

最近体験型博物館というのが大流行で、何でもかんでもさわって体験できるという博物館もありますが、そんなことを本物の文化財ですと文化財は破損してしまいますね。ですから体験博物館は原則は模型で体験します。実物資料を展示している本来の博物館の使命は決して体験ではありま

せん。で、この4つの基本柱に沿って、数多くの細かな活動を展開していきます。資料の計測やカルテ作りは調査研究ですね。常設展や特別展、企画展というのは教育普及活動です。講座や講演会、レクチャーコンサート、ワークショップ、移動博物館などもそうですね。楽器博物館でやっているレクチャーコンサートはコンサートの様子を写真やビデオに記録し保存して、それをまた再利用して展示したりしますから、収集調査研究活動でもあるわけです。

一なるほど、4つの大きな柱ですね。4つの中で比重はあるのですか？

もちろん4つとも大切なんですけど、一般の人々の目に触れるのはやはり教育普及活動の展示や講座やコンサートですよ。だからこれが博物館の一番大きな仕事だとよく勘違いされるんですけど、実はあとの3つのほうがもっと重要なんです。いい展示をするためには、いい資料やいい情報がないといけません。情報はじっとしていてもやってきません。自分たちで求めて調査研究していかないとだめです。ちょうど料理と同じ。いい料理を出すためには、ものすごく時間をかけて下ごしらえが必要ですよ。展示もそうなんです。展示するまでの調査研究、準備の時間とエネルギー、これがとても重要です。スポーツでも試合の時間より練習の時間のほうがよっぽど長くて多いでしょう。ものごとを成し遂げるには準備が大切なんです。

中身のない上っ面だけの展示はすぐに化けの皮がはがれます。中身が大切なんです。つまり博物館の命の源、心臓部にあたるのが調査研究ですね。調査研究がおろそかになると、その博物館はもう死んだも同然です。



奈良春日大社祭礼調査



韓国の農樂調査

そして資料を修理修復して保存するということ。モノはただ置いておくだけでも劣化していきます。常日頃のメンテナンスが大切。博物館スタッフは常に資料を掃除したり修理したりしているんです。目立たないけどとても大切な、時間のかかる仕事です。



収蔵資料の掃除と修理

—浜松の楽器博物館は楽器を主人公にして、その楽器を奏でる人々や、奏でられる音楽についても紹介なさっていますが、どんな工夫をされているのでしょうか。

楽器は音楽を奏でるための道具であることは当然で、音楽演奏において楽器の魅力が最大限に発揮されることは言うまでもありません。ただじっと置かれてあるだけの楽器は、活動していない休息状態と言えます。ですから、当館では、その楽器の音の展示や演奏風景の映像展示もできる限りしていますし、その楽器を使ったコンサートもかなりたくさん開催しています。年間10数回しているレクチャーコンサートでは、必ず何回かは所蔵楽器を使いますし、地元の静岡文化芸術大学と協力して東京でコンサートをしたりもしています。

楽器にとっても時々演奏される方がコンディションを良好に保つためにもいいので、細心の注意と楽器への敬意を持って演奏するわけです。



所蔵チェンバロを使っのレクチャーコンサート

展示については理想を言うと、すべての楽器に専門の演奏家がいって、毎日展示室で生の演奏をする、というのが最高なんですけど、そんなことは不可能。コンサートも毎日できるわけではありません。

そこで、所蔵楽器を演奏してのCDを作って販売しています。もちろん録音ですから生演奏の魅力には及びませんが、音が聴ける資料が何もないよりはあったほうがもちろんいいわけです。今までに23枚発売しました。16～18世紀のチェンバロ、19世紀のフォルテピアノ、トランペットやナチュラルホルンなどの金管楽器、サクソフォーン、18世紀のプロシアのフリードリヒ大王ゆかりのフルート、オーボエのストラディバリといわれるイギリスのバロックオーボエ、18世紀のクラヴィコード、日本の幕末から明治の尺八、

多種多様なヴァイオリンです。楽器単体であったり、アンサンブルであったりいろいろです。朝日新聞や毎日、読売新聞で推薦されたり、レコード芸術誌上で特選盤になったりと、外部からも高い評価を受けていますし、海外での評判も上々です。今後はガムランなどアジアの楽器をテーマにした博物館ならではのCDも作りたいと思っています。また民間企業と共同で、レクチャーコンサートを素材にした世界の楽器のDVDシリーズも制作発売しています。



所蔵楽器の数々のCD

—小学校への移動博物館も長年やっていらっしゃるんですね。

はい、そうです。2000年から始めました。今までに延べ85の小学校に行きました。子供の頃に楽器や音楽を通して、その国の人々の生活や文化を知ることが、国際理解の上でとても大切です。自分の感性や知性を豊かにすることにもつながります。また、もっと直接的には、楽器博物館のファンを増やすことにもつながります。子供たちはいずれ大人になって、また子供が生まれます。その子供が親に連れられてまた博物館に来てくれる、そういう社会を目指しています。欧米には子供博物館というのがたくさんあって、そういう「世代の循環」が確立しています。博物館が生活に溶け込んでいるんです。この移動博物館によって、少しでもそのような循環が実現することを願っているわけです。おかげさまで、移動博物館をすると必ず何人かの子供たちが楽器博物館に来てくれます。中には毎週土曜日曜に来てくれる子もいます。こんな子供たちは将来必ず楽器博物館の応援者になってくれるんです。



移動博物館



ヴァイオリンのCD録音



所蔵ヴァイオリンCD録音



移動博物館でアングルン体験



移動博物館で馬頭琴体験

—展示について教えていただけますか。

展示というのは、その博物館の性格が社会に出る顔のようなものです。展示には常時見られる常設展と、特別展や企画展など会期を限ったものがあります。特別展では外部から資料を借りてきて展示したりと普段とは変わって豪華な内容になり、見学者も増えるわけですが、実は本当は大切なのは常設展です。博物館のコンセプト、考え方、調査研究のレベルなど、実力が現れる展示だからです。

楽器博物館の展示は15年前の開館当初はヨーロッパと日本の楽器650点くらいでスタートしました。アジアやアフリカなどのコレクションはまだなかったのです。開館してからこつこつと楽器を収集して、2003年くらいにようやく一応世界をカバーするコレクションがそろい、2006年3月に展示室もリニューアルして、基本コンセプトの通り「世界の楽器を同じ目線で平等に展示する」というのが実現しました。

でもまだ開館15年で中学校卒業程度の段階、基本的な情報は蓄えましたが、まだまだこれから学ぶべきことがいっぱいあります。開館20周年、

つまり成人式までのこれからの5年間は、今まで蓄えた多くの知識や情報を再編成して、さらに新しい情報も加えながら、常設展の整備に力を注ぐことが重要と考えています。映像や写真、音声をふんだんに使った奥深い展示を実現したいと思っています、目下いろいろと企画中です。



—ありがとうございました。次回は楽器や音楽の持つ魅力についてお話していただく予定です。

レクチャーコンサート・イブニングサロン・講座

第100回レクチャーコンサート

快音快感・カリブのスティールパン

カリブ海に浮かぶ島国トリニダード・トバゴの楽器スティール・パンのコンサートを開催しました。ドラム缶を加工して作られたとは思えないスティール・パン独特の心地よい音色とカリブ海の軽快な音楽“カリプソ”の名曲「さらばジャマイカ」やディズニー映画「リトル・マーメイド」から「アンダー・ザ・シー」などの曲を楽しみました。休憩中には、スティールパンの体験タイムもあり、多くのお客さんが参加しました。また、演奏の合間にはリーダーの村治進さんが現地で撮影された写真を解説付で紹介されました。遠いカリブの楽園に思いをはせたひとときとなりました。



日時：平成22年5月2日(日)14:00～16:00

会場：アクトシティ音楽工房ホール

出演：ショート・スティックス 入場者：124人

第101回レクチャーコンサート

すまごと 須磨琴～遙かなる平安の雅～

須磨琴は、平安時代から神戸市須磨の地で伝承されている一弦の琴です。伝説によれば、在原行平が須磨の地に流されたときに、寂しさを紛らわすために一弦の琴を作ったことが始まりといわれています。現在までの長い年月の間には何度か衰退期があり、特に昭和初期はひく人もなく、須磨琴の存在さえ忘れられていた時期もありました。しかし、昭和40年に須磨寺で一絃須磨琴保存会が結成され会員が復興に尽力された結果、現在もそのみやびな音色を聴くことができるのです。

コンサートでは、在原行平が須磨に流された心情を綴った和歌に曲をつけた古典曲「須磨」などの伝承曲がしとやかに演奏されました。



日時：平成22年6月26日(土)14:00～16:00

会場：アクトシティ音楽工房ホール

出演：一絃須磨琴保存会 入場者：85人

イヴニングサロン

二人ハ弦十色～ライヴァル二人の競演～

バロック時代のフランスの大作作曲家ルクレールとギニョンのヴァイオリン二重奏曲をテーマに開催しました。同時代を生きたルクレールとギニョンは、当時音楽家の最高の職である宮廷楽団監督の地位をめぐって対立したライヴァルです。二人の巨匠が遺した作品を、息の合ったアニマ・コンコルディア（パウル・エレツラさん、戸田薫さん）の演奏で聞き比べ、当時の優雅な室内楽を堪能しました。



日時：平成22年5月8日(土)18:30～19:30
会場：展示室天空ホール
出演：アニマ・コンコルディア 入場者：67人

イヴニングサロン

ワルツに恋して…

ショパン生誕200年を記念してショパンのワルツをテーマにコンサートを開催しました。使用したピアノは館蔵の1869年製のプレイエル社製ピアノ。ショパン演奏のスペシャリスト河合優子さんによる演奏でお楽しみいただきました。ショパンが生涯愛したプレイエル社のピアノの柔らかな音色は現代のピアノで聴くワルツとはまた異なる魅力をかもしだします。19世紀のサロンのような優雅なひと時でした。



日時：平成22年6月2日(土)19:00～20:00
会場：展示室天空ホール 出演：河合優子 入場者：86人

講座

シルクロード民族音楽紀行

この講座は、シルクロードに沿った国・地域の音楽文化をテーマにした全8回の連続講座です。文化交流の大動脈として古くから機能していたシルクロードには多様な音楽文化が芽吹きました。今も各地域・民族に伝えられている音楽文化を、貴重な音源や映像を用い明治大学名誉教授の江波戸昭さんの解説で紹介しています。

これまでに、モンゴル、チベット、アフガニスタン、イラクなどの6回分が終了しました。第7回「レバノン・シリア・ヨルダン」(9/25)、第8回「トルコ」(10/9)は現在受講者募集中です。この機会に、シルクロードの音文化を探求してみませんか。



会場：研修交流センター 講師：江波戸昭(明治大学名誉教授)
入場者：181人(第1回から6回までの延べ人数)

アジアの楽器の日本画寄贈



昨年度の企画展「絵画の中の楽器たち」での作品の展示がご縁となり、横浜在住の日本画家仙波存乃恵(せんばそのえ)氏から、展示された日本画10点が昨年度末に寄贈されましたが、6月によりやく常設展で展示されました。展示されたのは「伽倻琴(カヤグム)の譜」(写真)「幻音」「ビルマのサウン」「ラーガI」「幻音」「五弦琵琶考」「箏篋の音」の6点。韓国のお琴の伽倻琴やビルマの豎琴として知られるサウン・ガウ、インドのシタールや古代アジアの弦楽器の五弦琵琶や箏篋が、日本画の美しい色彩で鮮やかに描かれています。サイズはどれも約2メートル四方の大きなもの。展示室でひとときわ輝いています。是非ご覧ください。

体験ルームに電子ドラム！

体験ルームに電子ドラムが仲間入りしました。浜松市に本社のある電子楽器メーカーローランド株式会社のローランド芸術文化振興財団から、電子楽器のV-ドラムとクラシックオルガンを5月に寄贈していただきました。

V-ドラムは、体験ルームに置いて入館者が自由に演奏できるようになっています。なかなか楽しいですよ。皆さんも是非ドラマー体験を試してみませんか。



◆これからの催し物

- 展示室ガイドツアー 毎日曜日 展示品の解説
※催し物により変更もあります。
- 展示品の演奏デモンストレーション 毎日1時間毎
チェンバロや19世紀のピアノなどのデモ演奏
- 特別展
「特別展「バンジョー大博覧会」
会期：7/31(土)～8/31(火) 展示室
- 15周年記念企画
「電子楽器の未来を探る～電子チェンバロの可能性～」
10/3(日)13:00 展示室天空ホール
- レクチャーコンサート
「バンジョー大博覧会」
8/22(日)14:00 音楽工房ホール
「もうひとつのリコーダー～“ヴォイスフルート”の魅力～」
9/4(土)18:45 展示室天空ホール
「瞑想の奥へ、響きの彼方へ～地無し尺八の世界～」
9/21(火)19:00 音楽工房ホール
「フォルテピアノの神髄～巨匠スタンリー・ホッホランドの
ベートーヴェン～」10/30(土)16:00 音楽工房ホール
- イブニングサロン
「チャターに魅せられて」
8/7(土)18:30 展示室天空ホール
「オールドタイム・バンジョー・ナイト」
8/22(日)19:00 展示室天空ホール
「フレンチ・クラヴサンの美」
9/17(金)19:00 展示室天空ホール
「フィンランドのカンテレ」
9/25(土)18:30 展示室天空ホール
「チェンバロ三重奏によるクリスタル・サウンド」
10/3(日)18:30 展示室天空ホール
「リコーダーカルテット」
10/16(土)18:30 展示室天空ホール
- 講座
「シルクロード民族音楽紀行(全8回)」
第7回「レバノン、シリア、ヨルダン」9/25(土)
第8回「トルコ」10/9(土)
いずれも13:30 研修交流センター
「民族楽器による音楽セラピー」
8/8(日)14:00 研修交流センター
「バンジョーの響き～その誕生から現代まで～」
8/21(土)18:30 音楽工房ホール
- 楽器体験ワークショップ
「夏休み子供のバンジョー入門教室」
8/21(土)14:00 研修交流センター
「大人のバンジョー講座」
8/21(土)14:00 研修交流センター

◆博物館日誌

- 4/24(土) 講座「シルクロード民族音楽紀行」第1回「モンゴルとその周辺」
13:30 研修交流センター 講師：江波戸昭 参加者：37人
- 4/29(木) ミュージアムサロン「リコーダー」14:00、15:30
展示室天空ホール 出演：嶋和彦(当館館長)、加藤はる奈 入場者：101人
- 5/1(土) ミュージアムサロン「バリ島のガムラン&ダンス」
14:00、15:30 展示室天空ホール 出演：ババンサリ 入場者：104人
- 5/2(日) レクチャーコンサート「快音快感・カリブのスティールパン」
14:00 音楽工房ホール 出演：ショート・スティックス 入場者：124人
- 5/3(月) ミュージアムサロン「カリブのスティールパン」
14:00、15:30 展示室天空ホール 出演：村治進、照喜名俊典 入場者：118人
- 5/4(火) ミュージアムサロン「10 ホールズ・ハーモニカ&クロマティック・ハーモニカ」
14:00、15:30 展示室天空ホール 出演：山口牧、宮田薫 入場者：158人
- 5/5(水) ミュージアムサロン「タンザニアのゼゼ&リンバ」
14:00、15:30 展示室天空ホール 出演：JT STARS 入場者：102人
- 5/8(土) 講座「シルクロード民族音楽紀行」第2回「ウイグル、キルギス、
チベット」13:30 研修交流センター 講師：江波戸昭 参加者：36人
- 5/8(土) イブニングサロン「二人八弦十色～ライヴアル二人の競演～」
18:30 展示室天空ホール 講師：アニマ・コンコルディア 入場者：67人
- 5/23(日) 講座「シルクロード民族音楽紀行」第3回「ウズベキスタン、
カザフスタン、トルクメニスタン」13:30 研修交流センター
講師：江波戸昭 参加者：23人
- 6/2(水) イブニングサロン「ワルツに恋して」
19:00 展示室天空ホール 講師：河合優子 入場者：86人
- 6/5(土) 講座「シルクロード民族音楽紀行」第4回「アフガニスタン」
13:30 研修交流センター 講師：江波戸昭 参加者：32人
- 6/7(月)～6/11(金) 移動楽器博物館(芳川北小学校)
児童数：679人
- 6/22(火)～6/25(金) 移動楽器博物館(竜禅寺小学校)
児童数：451人
- 6/26(土) レクチャーコンサート「須磨琴～遙かなる平安の雅～」
14:00 音楽工房ホール 出演：一絃須磨琴保存会 入場者：85人
- 6/27(日) 講座「シルクロード民族音楽紀行」第5回「イラン」
13:30 研修交流センター 講師：江波戸昭 参加者：28人
- 7/1(木) 市制記念日(入館無料日)
- 7/3(土) 開館15周年記念企画「親指ピアノフェスティバル～みえてくるアフリカ～」
「ワークショップ」12:30 研修交流センター 参加者：27人
- 7/3(土) 開館15周年記念企画「親指ピアノフェスティバル～みえてくるアフリカ～」
「コンサート&講演会」15:00 音楽工房ホール 入場者：67人
- 7/5(月)～7/6(火) 移動楽器博物館(鏡山小学校)
児童数：41人
- 7/10(土) 講座「シルクロード民族音楽紀行」第6回「イラク」
13:30 研修交流センター 講師：江波戸昭 参加者：25人

利 用 案 内

常設展観覧料：大人400円 高校生200円
中学生以下・障害者・高齢者(70歳以上)は無料
開館時間：9:30～17:00
休館日：毎月第2・4水曜日(祝日の時は翌日)、年末年始、
その他施設点検等のための臨時休館日

浜松市楽器博物館だより

平成22年7月10日発行 No.60
編集 浜松市楽器博物館
〒430-7790 浜松市中区中央3-9-1
TEL 053-451-1128 FAX 053-451-1129
E-MAIL wakuwaku@gakkihaku.jp
URL <http://www.gakkihaku.jp/>

お知らせ：「浜松市楽器博物館だより」は、ホームページからも見ることができます。また、ホームページでは最新のイベント情報も紹介しています。ぜひご覧ください。